

緑窓



青山学院中等部緑窓会会報

第5号

1996年(平成8年)5月1日発行

青山学院中等部緑窓会 発行人 外崎宏司

〒150 東京都渋谷区渋谷4-4-25

電話 03-3498-5387

中等部創立五十周年にむけて

来年四月で、新制中等部が最初の新人生を迎えてから満五十年になります。

五十年前の一九四七年(昭和二十二年)に十二歳であった一期生は、当然の事ながらその時には六十二歳となり、三期生は既に還暦を迎えているということになります。

更にその三年後の西暦二〇〇〇年には、緑窓会の創立(一期生の卒業)から五十周年という年を迎えます。

この半世紀は、卒業生や中等部にとつては勿論、日本にとつても、世界にとつても大きな変動をともなった期間でした。

然し、そうした変化を乗り越えて、中等部の中に、今も変わらずに流れている、伝統といったものが感じられるのは、建学の精神と、教職員の方々のためまないご努力のおかげでしょうか? 心強い限りです。

我々緑窓会も一九九〇年に四十周年を迎えて以来、「原点・祝祭・継続」を柱として毎年「緑窓会の日」を開催してきました。

沢山の同窓生にお手伝い頂きながら、手作りの、ホーム・カミングデーのような半日を過ごします。

中身は、青山学院の建学の精神を原点に据えて、中等部時代に味わった、自由で、明るさと新しさにあふれた、そして楽しいだけでなく、文化的な香りをもち、小さくても、何か慈善につながるよう

「緑窓会の日」に会いましょう!

わが中等部も50周年、そして「緑窓会の日」も今年で七年目を迎えます。

「友だちの味というのは、年をとってくるにつれて、じわりじわりとわかってくるものです。古くからの友人と会い、過去の出来事を語り合うことによって、若かったころの自分を精神的に取り戻すこともできますしね。」こう話されているのは、今回、講演して下さいます日野原重明先生です。学生時代には辛い闘病生活を、そして二十数年前には、恐怖の「ヨド号のハイジャック」体験などされて、今、人間らしい医療や看護のあり方について積極的な発言をされて

副会長 白井 茂(6期)

な、そんなことを盛り込んでいる会です。

また、活動再開と同時に、会則を改正し、役員の任期制や定年制を設けるなどとして、出来るだけ多くの方に役員に参加して頂けるよう配慮しました。

『これは同窓会という物が、あくまでも一部の人の物でなく、会員みんなの物だという精神に基づいています。』

あと、一年と迫ってきた五十周年。

今までの集大成が出来るでしょうか?

どんな記念事業をしたら良いでしょうか?

この何年か、七期、八期と一年ずつ当番の期をすらしながらやっていますが、来年は四十周年の時のように、全部の期で力をあわせてと考えています。

一人でも多くの同窓生にご参加頂き、学校側とも良く相談しながら、作り上げていかねばなりません。

中等部と緑窓会の原点を踏まえながら、二十一世紀に向かって一つの節目となる、そんな祝祭を成功させ、そして次代に継続させていきたいと願っています。

同窓生の積極的なご意見や、お手伝いの可否などを事務局宛御寄せ下さい。

います。講演の前に8期の黒田さん、12期の近重さんが加わった18名の弦楽合奏団の演奏を聞いて下さい。「梓アンサンブル」は主にバロック音楽を演奏する目的で結成された弦楽合奏団です。名称「梓」は、弓矢の弓がむかし梓の木で作られたことにちなんで名付けられました。

あわただしい毎日を、何となく過ごされている方、子育てに追われている若いお母さん、そして、現在、年老いた両親を看護されている方、是非、母校に足を運んで下さい。日野原先生のお話で、きつと力がわき、明日への希望で気持ちが新たにしたいと思います。そして、たまに会った同窓生達と礼拝にのぞみ音楽を聞き、お茶の時間にはおおいに語って下さい。別れる時は「また来年もここで会いましょう」を合言葉にして下さい。

講演テーマ

「友だちづくりによる
人生の午後の歩み」

日野原重明先生

日野原重明先生略歴

明治44年10月 山口県生まれ
昭和12年 京都大学医学部卒業
昭和26年 米国エモリー大学に留学

現職

昭和49年2月 聖路加看護大学学長
昭和59年2月 学校法人 聖路加看護学園 理事長
昭和62年2月 日本総合健診医学会(会長)
平成4年4月 聖路加国際病院 院長

日野原先生「専門

内科学(循環器)
予防医学、健康教育、医学教育、看護教育、終末医療、老年医学

《入手可能な著書》

『死をどう生きるか』(中央公論)1993.3.(¥600)
『老いを創める』(朝日新聞社)1985.3.単行本(¥1,200)文庫版(¥440)
『人生の四季に生きる』(岩波書店)1987.7.(¥1,400)
『生と死に希望と支えを』(婦人画報社)1990.6.(¥1,400)
『命をみつめて』(岩波書店)1991.2.(¥1,800)
『医と生命(いのち)のいしずえ』(同文書院)1991.4.(¥1,800)
『病むことととること』(日本基督教団出版部)1991.10.(¥1,300)
『生きる』(岩波書店)1993.3.(¥1,600)
『看とりの愛』(春秋社)1994.4.(¥1,854)
『六十歳は二度目の成人式』(ま書房)1994.8.(¥1,400)
『豊かに老いを生きる』(春秋社)1995.10.23.(¥1,854)



「梓アンサンブル」

黒田 明子さん [8期] (旧・笹原)
近重 晶子さん [12期] (旧・武藤)

*主にバロック音楽を演奏する目的で一九九二年に結成された弦楽合奏団で、名称「梓」は弓矢の矢が昔、梓の木でつくられたことにちなんでつけられたそうです。メンバーの多くは音楽大学出身者で、今までに多くの合奏経験を積んできた社会人・主婦からなります。

メンバーは、ヴァイオリン：10名

ヴィオラ：3名

チェロ：3名

コントラバス：1名

計17名と指揮者・江原 功氏です。

梓アンサンブル プログラム

レスピーギ リュートの為の古風な舞曲とアリア第3組曲
モーツァルト デイベルティメント第2番 ニ長調 K.126
チャイコフスキー 弦楽のためのセレナーデ ハ長調 作品48
ボッケリーニ メヌエット
ヨハン・シュトラウス ビチカートホルカ



●コンサート紹介

「維持費納入の
お願い」

会計 松田百代(14期)

今年(四年)は一度の会費納入の年です。一九九二年度から会費の払い込みがはじまり四年が経過しました。四年間で約二七四〇名の方々に会費を払い込んでいただきました。四年毎に二〇〇〇円(一年毎に五〇〇円)という会費の納入がわかりにくい安すぎるという会員の声もありましたが、少しずつ費用を分担するという仕組みは一九九六年度も継続していきます。『オリンピックの年は会費の払い込み』と覚えて下さい。次の二〇〇〇年までには郵送費、消費税アップ等経費の増加という問題が予想されます。しかし、今回は安直に会費の値上げという方法を取らないで会員一人一人の協力によって解決していきたいと考えています。

本年度は、緑窓会にとって、中等部創立五十年という大きな行事を控えた大事な年になります。

会員各位のご協力を心よりお願い申し上げます。

一年後の神戸は今…

雄谷芳郎(27期)

あの阪神大震災から早一年が過ぎました。

おかげ様で私達家族三人、今はすっかり落ち着いて毎日を過ごしております。

これも同窓の皆様に、様々なお力添えを頂いたおかげだと思います。本当に有難うございました。

震災後二ヵ月して、私達は地震の被害がほとんど無かった杜宅に移り住みました。

以来、私は仕事に家内は子育てに精一杯の毎日で、これまで感傷的に震災当時を振り返って考える余裕など全く有りませんでした。

そうした意味で、実際に現地で被害を受けた私達ですら、あの『阪神大震災』はもう遠い過去の出来事という感じです。

しかし、毎日、私が神戸から大阪まで通勤する電車から眺める神戸の街並みにはいたる所、まだまだ地震の爪跡が深く残ったままです。

一年たった今でも地震直後の状態のままのビルやマンション、民家もありますし、公園や学校のグラウンドの多くには仮設住宅がびっしり立ち並んでいます。

また、なんといっても神戸市内を東西に走る『阪神高速・神戸線』が至る所で撤去/寸断されている様子を見ると、神戸市民としては(これが全線開通までにあと一年だか二年かかるんだから、神戸の復興もまだまだだよなあ)というのが実感です。

そうした今の神戸の様子は、恐らく東京の皆さんに想像がつかないのだろうと思います。

たとえば、東京で親戚や友達に会うと、よく『まだ、(神戸では)空地になっていく所も多いんでしょ?』と言われます。

そうした台詞を聞くと、その言葉のニュアンスから察して、私も家内も内心(ああ、東京の人には今の神戸の様子は想像もつかないんだろうなあ)と思います。

ただそれは、神戸の私達がたとえば、神戸より前にあの大きな地震に見舞われた北海道・奥尻島や、土砂流に見舞われた九州・雲仙普賢岳の

被災地の「現状」など、正直想像つかないことを考えれば当然のことと思います。

やはり新聞や、なんと言ってもテレビで取り上げられなくなると、どんな大災害も大事件も大事故も私達の記憶から薄れ、まして現状がどうなっているのかなど想像も出来なくなるのだと思います。

そう考えると、やはりテレビというメディアの影響力というのは恐ろしく大きなものだと思えます。

先にお話したように、ふだんの日常生活で震災当時のことを改めて考えることは殆どない私達ですが、地震の恐怖そのものは忘れられるものではありません。

去年の秋口だったか、何日間か続けて寝入りばなに震度3くらいの余震があった時など、私も家内も友達も皆、胃がギリギリと痛んでしばらくは眠れませんでした。

そうした自分を経験すると、(ああ、どんなに時間が経っても、あの時の恐怖は体に染み着いているんだなあ)と思います。

そんなこともあって日常、我家でもとくに「就寝中の地震」に対してはある程度の心掛けをしています。

たとえば毎晩、枕元のタッパウェアの中には眼鏡、懐中電燈2個、山のような新品電池を欠かしませんし、携帯電話も必ず寝しなに一度放電した上でフル充電します。それに、また(再び)、厳しい寒さの屋外に避難するケースを想定し、家族三人のダウンジャケットや靴下なども寝室に用意してから毎晩寝るのが習慣となっています。

あと、ちょっと変わったところでは、車のガソリンをいつも満タンにしておくのが震災以来の我家の習慣になっています。

ガス欠の心配なく、ヒーターをかけた車の中であれば暖がとれますし、またなんと言っても、今度また大きな地震が来ればその時はすぐ車で現地を脱出しようと思っているからです。

今はまだそこまで徹底して備えていないのですが、今後近い内、よく言われる「最初の72時間=3日間」分の食料/飲料を我家でも備えようと思っています。

東京にお住まいの皆さんが、なかなか実際の体験なしに私達のような危機意識をお持ちになるのは難しいと思いますが、ある程度の日常の備えは是非お薦め致します。とくに小さな子供を抱えていると、災害時は本当に大変ですから…

大震災により教えられたこと…

神戸女学院大学文学部 学生部長 伊藤栄子(旧玉野)8期

私は関西に住んでいる数少ない青学中・高等部出身者の一人です。中・高等部6年、ICU4年、米国ミシガン大学大学院5年半(英語学博士号取得)の学生生活を経て、1972年より神戸女学院大学文学部で英語学を教えてきました。現在は授業の他に学生部長の任務を与えられています。

昨年1月17日早朝5時47分、上下左右の物凄く揺れで目を覚ましたものの、今から思えば全く根拠のない「関西には大地震はない」という確信のせいで、私は揺れささおさまればと思って、さほどの恐怖も感じずにベッドの上でじっとしていました。静かになってからとりあえず台所に行き、ありとあらゆる食器類が床の上に粉々になって飛び散っているのを見て、阪神・淡路の広い地域にあれほどの被害をもたらした大地震が起こったとはその時は想像もしていませんでした。幸いなことに私の家のあたりは高台で地盤が堅かったせいか、本体そのものに大きい被害を受けた家は近所には少なかつたようです。しかし、それでも電気・ガス・水道の全ての完全復旧にはそれから2ヵ月近くを要しました。

地震当日はどうにもならず家にいましたので、周囲の被害状況もあり分かりませんでした。翌日大学に歩いて行った途中の惨状は、どんなに説明しても現場を見た人でないと分かって頂けないでしょう。道路が四方八方に裂け、コンクリートの建物が傾き、電柱が横倒しになり、こんなことがあり得るのか、と思うだけでした。世界の主人公だと思いついてた人間と自然の関係が逆転した、まさに『不思議の国のアリス』の世界でした。そしてやっと大学に辿りつきますと、学生寮1棟、中高部建物1棟が傾き、部室・事務室分室などの小さな建物がいくつか全壊し、そして神戸女学院が自慢にしていた地中海様式の校舎群のうち文学館のオレンジ色の屋根が崩壊していました。ヘリコプターから写した崩壊した屋根のカラー写真が『朝日新聞』と『アサヒグラフ』に掲載され、これを見た同窓生の中には神戸女学院が壊滅したと思った人もあった、と後になって聞きました。今回の地震による被害は創立122年目を迎える学院の歴史のなかでも最大の試練の一つでしょうが、一人の学生・生徒教職員も失われなかったことは神様の深い恵みであったと思います。

さて、電気は復旧したものの水もガスも出ない、教室の壁には大きな亀裂、余震も頻繁、電車も最寄りの駅には来ない、という状況で、目前に迫った入試や在学生の定期試験をどうするのか、第一延期してもどうやってこれを全員に伝えるのか、教職員全員懸念に知恵をしまりました。後から思えば、ああした

ほうがよかったのでは、と思うことばかりでしたが、全ての学事日程を約一ヵ月遅らせてなんとか対処しました。失われた建物の再建には「激甚災害法」により国の助成が受けられるのですが、日常の対応にパニック状態ですのに、国は助成を受けるためには詳細な被害状況の報告および具体的な建築計画を至急文部省に提出しろというのです。失われた建物に代わるものとして、大学教育研究棟・学生寮、中高部校舎、の計3棟を建築することとなり、私も役職上、学生寮計画の取りまとめを仰せつかりました。計画書もどうにかまとまり、国の助成が受けられることが確定したのは秋になってからでした。その後の準備期間を経て去る2月23日に無事3棟の竣工式が行われました。助成を受けるといっても、20億の借入金もかかえての長く厳しい道程ですが、あの大地震からここまでよくたどりついたなあ、と感無量でした。

今なお地震の傷跡は各地にさまざまな形で残っていますが、もし今回の経験が私たちに何かを教えたとしたら、それは「共に生きる」あるいは「共に生かされる」ことの大切さ、貴さということでしょう。個人的には家族の連帯を改めて感じましたし、また関西に住んでふだん皆様とあまりお会いしていませんのに、多くの方に暖かい激励を頂きました。また、学院も青山学院を初めキリスト教学校教育同盟の加盟校からさまざまな支援を頂きました。この場を借りて深く感謝いたします。ありがとうございました。

〈スーパージョ・自然体教育〉

神道ゆふ子(ジュエリーデザイナー) 8期

青山学院正門前に建つ「子供の城」会館で1996年1月21日、鈴木衣子先生を囲んで8期1年C組及び先生を慕うゲストが集まった合同クラス会が開かれました。

42年前12、13才の多感な頃をなつかしみ楽しいパーティとなりました。(幹事の鎌田さんありがとう)。

クールでハイカラでユーモアのある衣子先生の生き方に感銘し、影響された女性達、手で押すと壊れてしまいうるようなキャシヤな先生に男として面倒かけまい、笑顔をプレゼントしたいと団結した男性達、運動会ではいつもブッチギリトップのクラス、勉強でもがんばり組も、もう少し組も熱心だったね。特に英語は先生に恥かせないようがんばったよね。何といっても、やさしさと団結

力」のあるスーパージョー組だったね。等々と髪が少し後退した彼、あんなに小さく細かったのに、少々太り過ぎの人、みな口々に思いついた話に興じた。

相変わらず小粋でさわやか衣子先生は3年前の1993年に退職なされるまで、45年間中等部の教壇に立たれ、「私の人生、始めて無職に徹して毎日楽しんであります。」と現在68才になられた近況を語ってくださいました。「私、面倒苦さがりやだったのよ。生徒の自主、自立にまかせて余り口を出さない様にしました。媚びない、見栄を張らない、背伸びしない、などを伝えられたらとの想いでしたね。自然体をモットーにしたつもりなの」

先生に42年振りにお目にかかり、この自然体教育こそ青山学院で育った我々の精神的根本となった事を再認識いたしました。

再来年1月の再会を約束して、まだまだ別れ難く2次会、3次会へと続き、青春時代、ツタのからまるチャペルの歌を口ずさみ、「自然体が一番」と50才半ばを迎えたそれぞれの想いに咀嚼して家路につきました。

「緑窓会の日」開催報告

「95緑窓会の日」実行委員長 山本秀雄(7期)

一九九五年「緑窓会の日」は、原点・祝祭・継続のテーマで、六月三日(土)青学講堂において開催されました。

本来は、礼拝の説教を飯久保会長より推薦いただきました。玉川平安教会の山口隆康牧師にお願い致しました。先生は「祝い記念する旅路」という演題でとてもやさしい語り口で、私達もなるほどというお話をしてくださりました。

礼拝の後には、短大地食堂にて懇談のティータイム、なつかしい先生方や先輩、後輩が一体となって話がもり上り、あつと言ふまの一時間でした。

最後は、中等部七期の卒業生で日本はもとより世界的に活躍なさっている作曲家「沢井一恵さん」が、グループ「OTO KO」の方達の素晴らしい演奏会でした。琴に関する考え方を改められた方も大勢いらつしやることと思われました。沢井さんの闊達なトークと、グループ「OTO KO」の方達の力強い演奏、またたく間に時間が過ぎてしまいました。

礼拝の時の献金は例年どおり、タイのハンセン氏病の救済組織である「チャタミット」に寄付されました。

今回も実行委員ばかりでなく多くの緑窓会会員に支えられて「緑窓会の日」を開催する事が出来ました。同窓会は、一人一人の御協力が必要です。一人でも多くの会員が会を作る事に参加されますようお願い致します。

今昔の感

平間 健夫



私はこの三月で中等部の教師生活にピリオドを打ちました。昭和二十五年以来、専任として四十年、非常勤講師として六年、本当に長い間お世話になりました。

昭和二十五年は、中等部の第一期生が卒業した年です。そして、今年は、第五十期生が新一年生として入学します。昭和二十二年生れの中等部も来年は満五十才というわけです。先日最後の期末試験の探点を済ませてほつとした日、青学講堂で在校生による送別会がありました。その時、講壇の上でふと思ったのは、今、自分が立っているこの場所は昔何であつたかということです。あやふやな記憶ですが、旧初等部校舎裏で粗末な教員住宅と自家用菜園があり、あとは空地だったと思います。何しろ当時は建物が少なく空地が多かつたのです。グラウンドだって広い空地のようなもので夏休み明けには全校生徒で生い繁った雑草を抜き、石ころを拾ってからでないと体育の授業ができないような状態でした。その空地で生徒達は缶けり、馬乗り、ゴム段とび等々で実にいきいきと遊んでいました。

現在は、校舎も校庭も以前とは比較にならないほど立派になり、昔の姿が思い出せないくらいです。雑草に覆われた空地などは一坪たりとて見当りません。学校生活の中身も外観に劣らないほど変わりました。一例をあげると、印刷物は質、量共に様変わりです。色々な本から必要な箇所をコピーし編集、印刷するというような仕事はごく普通のこと、誰でも手軽に行っています。時間も手間もかからず、余りに手軽なためつい量が増えてしまいます。ところがコピー機の無かつた頃は印刷と言えは全部ガリ版です。ろうをひいた原紙をやすり板の上に置いて鉄筆でガリガリ一字ずつ書いていく仕事(ガリ切り)は今では懐かしい思い出ですが、かなりの時間と労力を要するものでした。家に持ち帰る仕事ではこのガリ切りが一番多かつたと思います。深夜までかかつて書き上げた原紙を細長い紙筒に入れて朝学校へ持って行くのが常でした。コピー機の出現がいかに画期的でありがたいものであつたかはガリ切りを経験した者でないとは解らないでしょう。

ここからは中等部に限らない広い話になりますが昔と今とは比べようもないほど物は豊かに、情報は多く、生活は便利で快適になりました。これは確かによいことです。しかし、世の中はよいこと半分悪いこと半分と古くから言われてきます。何か豊かになれば何か貧しくなるし、誰かが自分の意志を通してご気嫌になれば誰かが意志を砕かれて口惜しい思いをするわけです。平和ぼけなどという言葉もありますが、これほど長い平和、豊かで便利な生活が

1995(平成7)年度収支計算書

青山学院中等部緑窓会 1995(平成7)年4月1日
自 1996(平成8)年3月31日 至

支 出 の 部			収 入 の 部		
科 目	金 額		科 目	金 額	
会報作成費	595,903		会費収入		
会報送付費	1,129,278		1995年度入会金	804,000	
名簿管理費	259,097		維持会費収入	2,465,000	
事務用品費	11,737				
事務用品費	64,079		諸収入		
会交印水通慶雑	77,440		預金利息	86,721	
道刷熱信	22,295		雑収入	3,000	
通光	12,000				
慶信	149,768				
雑費	160,000				
緑窓会の補助金	80,589				
(小計)	467,730				
(小計)	(3,029,916)		(小計)	(3,358,721)	
次期繰越金	4,872,831		前期繰越金	4,544,026	
合 計	7,902,747		合 計	7,902,747	

1996(平成8)年度収支予算書

青山学院中等部緑窓会

支 出 の 部			収 入 の 部		
科 目	1996年度	1995年度	科 目	1996年度	1995年度
会報作成費	600,000	500,000	入会金	825,000	825,000
会報送付費	1,200,000	1,200,000	維持会費	550,000	550,000
名簿管理費	300,000	300,000	維持会費	2,300,000	1,400,000
事務用品費	600,000	600,000	受取利息	100,000	150,000
事務用品費	50,000	50,000			
会交印水通慶雑	25,000	25,000			
道刷熱信	90,000	80,000			
通光	20,000	20,000			
慶信	12,000	12,000			
雑費	80,000	80,000			
緑窓会の補助金	60,000	60,000			
雑費	50,000	50,000			
雑費	400,000	200,000			
事務機器購入費	0	200,000			
(小計)	3,487,000	3,377,000	(小計)	3,775,000	2,925,000
当期収支差額	288,000	-452,000			
次期繰越金	4,380,026	4,092,026	前期繰越金	4,092,026	4,544,026

代償なしに享受できる筈はありません。裏の半分は大変恐いものだと思います。例えば学校にも一般社会にもある程度の悪や危険が存在するのはやむを得ないというよりはむしろ自然で健全なバランスだと思ふのです。それらの悪や危険には当事者が個別に対応してきました。ところが昨今は平和、平等、人権などのよい言葉、反論の余地がない正しい言葉にすっかり毒気を抜かれ個人では悪に対応する元気がなく野放ししか見て見ぬ振りです。又、少しでも危険性のあるものは規制によって制限、若しくは排除します。要するに個人では何もせず冷たく過保護な全体的対応だけが目立ちます。これで自由な個性や逞しい創造力が育つとは思えません。こういう不自然で嘘っぽい社会では人間の活力もほとんどいってしまふでしょう。

半分の悪いことはまだまだあります。各種公害、地域規模では、環境破壊、人間の体質劣化等々何とも高い代償ではありませんか。こんな高い代償を払ってまで今以上の豊かさや便利さを求める人は少ない筈ですが、組織、技術、物、情報などが勝手に独り歩きをして、個人を巻き込み押し流しているのだと思います。そしてその潮流は誰も望まない方向へ恐ろしい勢いで進んでいくようです。私のペンも独り歩きをして思わぬ方向へ走ってしまいました。が最後ということでしょうかお許し下さい。

「五代目常盤津文字兵衛を襲名して」

鈴木淳雄(28期)

とても楽しかった中等部の三年間を過ごし、卒業と同時に、常盤津紫弘の流名を受けて、常盤津三味線演奏家としての第一歩を踏み出しました。そして本年二月、自ら創った「紫弘」という名前に別れを告げて、五代目常盤津文字兵衛を襲名しました。十九年間使い続けた自分の名前が変わる、という感慨と、非常に責任の大きい名前を受け継いだ事への、畏れにも似た感覚の中で、未だ新しい名前を呼ばれても、瞬時には反応できずにいます。

常盤津という三味線音楽のジャンルは市七四七年初世常盤津文字太夫によって、江戸で確立されました。以来歌舞伎との密接なつながりのなか現在まで発展してきました。江戸時代末期には、一つの町内に一人の常盤津の師匠がいた」と言われるほどの隆盛を極めました。現在では郵便局の窓口などで、「トキワズさん」と正しい名前と呼ばれると、思わず感激してしまうような有様です。常盤津を含め、日本音楽全体をもっと多くの方々に聞いて頂く機会を作るのも、私の仕事のひとつと感じています。

文字兵衛家は代々作曲家としても多くの活動をしてきました。曾祖父二世文字兵衛は坪内逍遙との合作「お夏狂乱」などの、祖父の三世文字兵衛も二世市川猿之助の為に作曲した「独楽」などの、現在でも度々演奏される作品を多く遺しています。父の英寿(四世文字兵衛)も三百曲以上の作品を世に送り出しています。このような環境のために、我が家は新しい音楽活動に関しては、極めて寛容でした。東京芸術大学在学中に、作曲科の友人に三味線とオーケストラの曲が無いから書いて見れば?と持ちかけると、冗談好きの友人は本当に曲を書き上げました。芸大の学園祭で試験的に初演したところ、驚くべき反響があり、翌年の二月ニューヨークのカーネギーホールで行われる、ミュージックフロムジャパンコンサートで正式の世界初演をする事となりました。一ドル二四〇円時代のニューヨークは学生の身にはなかなかつらいものでしたが、若くして世界の檯舞台に立てた事は、私の音楽感に大きな影響を与えてくれました。このころより少し前から、私自身の中には、新しい日本の音楽を作り上げて行きたいという欲求が大きくなっていました。日本にはこれだけ多くの西洋楽器があり、演奏家も豊富なのに、日本楽器との合奏曲があまりにも少ないのです。私の作曲活動の原点は、ここから始まりました。ピアノ、ヴァイオリン等の西洋楽器と日本楽器の室内楽形式の曲を中心に現在までに作品演奏会を四回開催する事ができました。この路線はおそらく私のライフワークとなる

ることでしょう。この延長線上の仕事の一つがコマーシャルの作曲、編曲です。不思議な縁でコマーシャルの作曲をするようになりました。デビュー作は鼻炎の薬でした。「ビエン、ビエン」と言う囃子ことばで好評を博したこのコマーシャルは、三年間も使用されました。コマーシャルの世界は多くの情報を一五秒ないし三〇秒の中に押し込めます。映像も音楽もまさに真闘勝負です。非常に多くの要求が出される現場ですが、スリリングで楽しいものです。コマーシャル作家としての醍醐味は、自分が関与した作品によって、商品の売り上げが伸びたことを知ったときです。最近はお手伝いしたあるコマーシャルによって、電子レンジの売り上げが五〇パーセント伸びたという嬉しいお話がありました。

常盤津という音楽は非常に演劇性の強いものです。前述の通り、常盤津は歌舞伎と共に発展してきたため、歌舞伎の台本をそのまま音楽化したものが多く、その結果ドラマティックな構成になっています。いふなれば、「江戸のトレンディードラマ」とでも申しましょうか。多くの方に常盤津をはじめ、日本音楽をご紹介するときに、「歌詞は日本語ですから、ドイツ歌曲やイタリア歌曲よりわかりやすいですよ」と申し上げます。そうです日本音楽はきつと楽しく聞

小さな囁きが 大きな輪に

門田美智子(8期)

8期B組の丸岡さんが、ある日「私、今、Tシャツに絵を描いているの、ケニアの大学の図書館を作るための募金活動に協力しよう」と思って「Tシャツ買ってくれませんか?」彼女の何気ない一言で、最初は仲間達が彼女の手描きTシャツを買う事によって、小さな協力をしていました。その話を、伊藤先生の奥様が聞かれて、お金をただポンと出すだけでなく、物を作り、それを皆様が買って下さり、喜んでいただける募金活動ならお手伝いしようと言われ、忙がしい日々の中で、一枚一枚、丁寧に素敵な花の絵を描いて下さいました。それを、去年の「緑窓会の日」にも、販売する事が出来ました。そして、丹精こめて描かれた60枚のTシャツは、全て皆様のお手もとに。協力いただきました収益金は、デイスター大学の募金協会の方へ送らせていただきました。昨年の大学祭で、一時帰国されていた佐伯牧師にお会いして、大変感謝されました。その時に、いただいたお礼状を掲載させていただきました。あと、もう一息というお言葉でしたので、丸岡さん、伊藤先生の奥様も、またがんばって絵を描いて下さっています。きつとすばらしいTシャツが沢山出来あがってきていると思います。今年も、販売いたしますので、皆様の協力よろしく願っています。

デイスター大学の図書館は、去年の十二月より建設が着工されたそうです。

いていただけだと思います。

三四歳で文字兵衛なんて老け込んだみたいでちょっとそぐわないね。などと御同業の方は真剣に同情してくれました。私自身は今回の襲名を「責任の重いポストへの配置転換」ととらえています。名は変わっても人間が変わるわけでは有りません。自分ができること、自分がこの世に遺していかなければならないことが、なんであるかを冷静に見つめながら、次の世代により多くの事を伝えられるように努力してゆくつもりです。

今回は邦楽界でも非常に珍しい一家四人の同時襲名、改名となりました。父四代目文字兵衛は英寿に改名。弟、一佑太夫(鈴木雅雄、中部部三〇期)は、我が家にゆかりのある名前である七代目兼太夫を、妹、百々智衛(鈴木智子、中部部四〇期)は父の叔母の名を継ぎ二代目兼聖を襲名致しました。そこで、本年は、例年親子で開催しております勉強会「松乃実会」を襲名記念演奏会とし、来る七月十日国立劇場小劇場にて開催致します。

佐伯洋一郎氏のお便り

さる六月の「緑窓会の日」の当日に、アフリカ・ケニアのデイスター大学の図書館を建てる私どもの働きに、皆様のご協力をいただき有難うございました。数名の会員の御努力の結晶による美しい花の絵のTシャツを、多数お買いいただき、さらに来年度の緑窓会でもご協力いただけると伺い、感謝でいっぱいです。

キリスト品川教会を引退し、シルバー・ボランティア宣教師として、アフリカ・ケニアのデイスター大学へ行き四年たちました。聖書と神学を講じ、全学礼拝で説教するほか、日本からの募金で新しいキャンパスに図書館を建ててほしいと、千三百名の学生をもつ学長に頼まれたのです。

千七百平方メートルの図書館、一億円を目標に三年前から募金を始めました。背後に何の組織もなく、低迷する日本経済のなかですが、個人を主力に七千万円弱を与えられました。もう一息です。アフリカの将来と苦勞を喜んで担う指導者が、じみちに育つことを願っています。皆様の上に神の祝福を祈ります。

中等部だより

中等部教諭 石出道雄

★教員異動

牧野周子先生

33年間の長きにわたって中等部に御奉職された牧野周子先生が、3月で定年を迎えられ、御勇退なさいました。養護教諭として生徒の健康管理・カウンセリングなど、多くの生徒が大変お世話になりました。

平間健夫先生

専任教員で40年間・講師で6年間の計46年間の長きにわたって中等部に御奉職された平間健夫先生が、3月で御勇退なさいました。理科教師として・テニス部や囲碁将棋部などの顧問として、多くの生徒に多大な感化を残されました。

★志賀正男部長召天

高等部教師として・また高中部部長として長きにわたって御奉職された志賀正男先生が、昨年7月下旬に緊急入院され、手術を受けられたのですが、8月2日に天に召されました。

夏休み中の事で、教員・生徒の葬儀参列ができなかったため、高等部・中等部とも、9月始業式当日に記念礼拝を行い、先生を偲びました。

8期卒業生の皆様

中等部8期の同窓会を「緑窓会の日」に合わせて開催することにいたしました。皆様の出席を心からお待ちしております。

記

日時 6月8日(土)
18:30~21:00
場所 青学会館校友会A室
会費 男性 8000円
女性 6000円

第3回青山学院大学同窓祭

今年も9月23日(月・祝日)に青山キャンパスを開放して楽しい企画がいっぱいの大学同窓祭を開催します。楽しみにお待ちしております。

★新部長

志賀正男先生の召天により、9月より副部長の職にあられた田中俊夫先生が高中部長代行に就任され、さらに新年度4月より2年間、高中部長に就任されました。

★中等部創立50年

中等部は今年4月に創立50年を迎えました。今年の新生が50期です。中等部では、昨年から「50周年委員会」が設置され、種々話し合い、次のような事の実施に向けてスタートすることになりました。

※来年度、「50周年」として各種行事を行なう

※中等部主催「記念礼拝・講演・公演など」

※緑窓会主催「緑窓会の日」を拡大

※記念誌発行

★お願い

50周年の記念誌を発行するために、資料収集をしています。在校時代の資料をお持ちの方はご連絡ください。

※写真(運動会・文化祭・旅行・合宿など)

※印刷物(学校配布物・クラブ配布物など)

※その他

学校には、これらの資料がほとんど無く、記念誌発行に際して困っています。コピー・複写でけっこうですのでお送りください。中等部資料室に保管させていただきます。よろしくお願いいたします。

事務局より

一九九三年九月、他の同窓会と共にウエスレーホールに移転しましてから二年半たちます。

現在は各週ごとに、五、六、七、九、十、十二期の方達が手伝って下さっております。今年も「緑窓会の日」が六月八日に開催されます。八期の方達を中心に十三、一八、二十三、二十八期がお当番ということで、度々、会合を開いている様です。

同窓会室は毎週火曜日、十三時から十六時三十分迄開室しておりますし、持ちよりのお菓子もたくさんありますので、お茶をのみにきらくにお過ごし下さい。お待ちしております。事務局を手伝って下さい。よろしく願っています。

28期のつどいのお知らせ

緑窓会の終了後、恒例の28期のつどいを開きますので、皆さまおさそい合わせの上、お集まりください。

日時 6月8日(土)
午後六時30分
場所 「すけぼり」
骨とう通り

会費 七〇〇〇円
※カウイスキービルB1F
改めてご通知いたします。

B組 阿部直子(旧性南)
(三七五七二四〇四)